

西田教授への弔詞

バーノン・レイノルズ

オックスフォード大学/
ブドンゴ保護フィールドステーション

初めて西田教授（「トシ」という愛称で呼ばれていた）に出会ったのは、私が1970年代後半にマハレを訪れたときのことでした。私は同僚研究者の杉山幸丸さんとダルエスサラームで合流し、一緒にタンザニアを横断してキゴマまで行きました。そこから私たちはマハレ調査隊のボートでタンガニイカ湖を南下してマハレに入ることになっていました。しかしそのとき、ボートの船外機が故障しており、そのため、私たちはキゴマで数日間とどまることになりました。その間にトシと出会い、しばらく時間を共にし、彼の仕事やマハレのチンパンジーについて話をしました。結局その後マハレに入り、調査隊の人々やチンパンジーにも出会うことができました。そのときは気づいていなかったのですが、私は甲状腺機能低下症に罹っていました。日本人研究者たちは、私にひどく体力がないのに驚いて、ゆっくり歩いて、気配りの利く調査助手を私に付けてくれました。この旅行中にトシに会ったのは一度きりだったと思いますが、その甲状腺の問題があったためあまりよく覚えていません。

年を経て、日本やいろんな場所でおこなわれた会議で、私はトシと何度も再会する機会を得ました。そのたびに、彼の深い友情や、チンパンジーのためにすべてを捧げた姿勢に、強く印象づけられました。私はマハレのチンパンジーについての彼の本を読みましたが、実はそれは日本で開催された国際霊長類学会大会で私たちに贈ってくれたものでした。

私が鮮明に覚えている彼との思い出は、パリのユネスコ本部で、数々のチンパンジープロジェクトのリーダーが一堂に会し、「世界遺産種」という新しいカテゴリーを作って、類人猿をそのカテゴリーの最初の種にしようとしたときのことです。トシが指導的な役割を果たす中で、私たちは有益な議論をすることができました。その間に訪れたパリの小さなレストランで、彼と共に過ごした時間も忘れがたい思い出です。

何よりも、彼が開始して、現在も成功を続けている調査地であるマハレ山塊のチンパンジーに関する彼の業績とともに、彼の名はこれからも記憶されることでしょう。フィールド調査地を開設した人だけが知る多くの苦労がありますが、トシは彼の学生にとって最高の基準となるような、疲れ知らずのフィールドワーカーでした。彼は、洞察力のあるフィールドワーカーにとって不可欠な鋭い観察眼を備えた人物でした。また目標への断固たる姿勢と人なつこい性格や態度を兼ね備えた人物として、私には思い起こされます。

私たちブドンゴの研究者は皆、彼を亡くして残念に思っています。

ご家族の方々に心からお悔やみを申し上げます。

（翻訳：西江仁徳）

学生時代の思い出

伊沢 紘生

宮城教育大学名誉教授

1961年に京都大学理学部動物学教室への配属が決ってから、'68年に同大学院理学研究科博士課程を退学するまでの7年間、西田さんとはずっと同期で同じ釜の飯を食べてきました。その間、公私にわたるどの局面でも、西田さんはいつも私の何歩も先を歩いていて、いつしかその後を追うのが私の生き方そのものになりました。西田さんは敬愛してやまない親友でした。

同期にはもう一人、加納隆至さんがいましたが、サルをやり始めた当初の頃、指導教官の伊谷純一郎先生が私たち3人をこんな風に評していたと、当時研究室の助手だった葉山杉夫さんから酒の席で聞いたことがあります。「あんな葉山、3人だけど、西田はせっかちな学究肌、加納はひょうきんな天才肌、伊沢は体力にものをいわせた意地っ張り、そう思わんか」と。なかなか的を射ていると、私はその時思ったものでした。

'62年の卒業研究で西田さんは、日本モンキーセンターが三河湾に浮かぶ無人の小島、野島に放飼中のタイワンザルを対象に選びました。すでに多くの研究がなされていたニホンザルとの比較がテーマでした。台風が続いて二つ通過した9月上旬の2週間、私は手伝いで彼と孤島暮らしをしました。宿舎はサルの糞がびっしり敷き詰められた小さな倉庫、明りはローソク、補給の船が着岸できず食事はカサガイとカメノテのスープでした。そんな夜、彼は両種のオスの行動の違いを丹念に説明してくれました。まだニホンザルを調査したことが全くないのに大変に詳しく、私は多くの文献を読み込んだ彼の豊富な知識に驚愕したのを、糞の臭さとともに鮮明に覚えています。

そのオスの問題が、西田さんの修士論文として結実したのは御承知の通りです。当時もう終わったと言われていたニホンザル社会構造論に果敢に挑み、村八分ザルとかボス争いの敗者と考えられていたハナレザルがじつはオスの正常な存在様式であること、すなわち群れは閉鎖社会ではないことを初めて明らかにしました。私が西田さんのこの画期的な研究の後を追って、ニホンザル社会構造論に私なりに一矢を報いるのは10年以上後の事です。

大学4年の、卒論発表が終った'63年3月、西田さん

